

# はる 春がやってきました！

## 根っこのこどもたち目をさます

ジビレ・フォン・オルファース え  
ヘレン・ディーン・フィッシュ ぶん 童話館出版 E-オ

はる春がちかづいてくると、じめんのしたでは、ねむっていた根っこのこどもたちが、土のおかあさんにおこされます。目がさめた根っこのおんなのこたちは、はる春にきるふくをぬい、根っこのおとこのこたちは、ねむっているむし虫たちをおこし、むし虫たちのからだにうつくしいはる春のいろをぬってやるのです。こうしてよういができる、はる春がやってきます。

## おひさまホテル

エーリッヒ・ハイネマン 文 石川 素子 訳 徳間書店 943-ハ

もり森のてまえに、なんねん何年もほったらかしにされたのほら野原がありました。はる春になるとくさ草やはな花たちがふゆ冬のあいだに見たゆめ夢の話をしていいます。まいとし毎年、のほらこびと野原のまんなかあたりに、は葉っぱのテントでりょうり料理やのもの飲み物の店を出します。トリーはバイオリンのめいじん名人でもありました。ところが、ことしはる今年の春、トリーはバイオリンをひかず、まいにちみせ毎日店がおわってもなんじかん何時間もほおづえをついてかんがえこんでいました。

## ケイゾウさんは四月がきらいです。

市川 宣子 さく 福音館書店 913-イ

ケイゾウさんは、しがつ四月がきらいです。それは、にゅうえん入園したばかりのこどもたちがあちこちでな泣いたり、しよちゅうケイゾウさんのせわ世話をわすれたり、にわ庭になかなかだしてもらえなかつたりするからです。ことしはる今年の四月からは、うさぎのみみこといっしょに住むことになりました。ニワトリのケイゾウさんのねんかん1年間はどんなねん1年なのでしょう。

# おやゆび姫

アンデルセン 原作 バーナデット 絵 西村書店 Eーウ

むかしむかし、あるところに、ちっちゃな子どものほしい女の人がありました。ある日、魔法使いのおばあさんからもらった種をまくと、やがて大きな美しい花が開き、花のまんなかに、ちっちゃな女の子がすわっていました。女の方は、女の子をおやゆび姫とよぶことにしました。ある晩のことです。いっぴきのヒキガエルが、おやゆび姫のねむっているクルミのベッドをかかえて庭へととびおります。

# ぬまばばさまのさけづくり

イブ・スパンク・オルセン さく・え 福音館書店 Eーオ

ぬまばばさまは、ぬまちにかぞくですんでいます。かぞくは、おとおとこのぬまじじさま、おちびのぬまむすめ、いたずらっこのぬまこぞうです。ぬまばばさまは、おひさまのひかりがだいきらいで、よるがくるとさけづくりをはじめます。こどもたちもざいりょうをあつめたり、さけづくりをてつだいます。

# 桜守のはなし

佐野 藤右衛門 作 講談社 627ーサ

佐野藤右衛門という名前は、京都にある植藤造園の桜を守る人に受け継がれてきたものです。桜守のしごとは、桜が散って芽がでてからはじまります。桜は人が守り、そだて、継いでやらなければ絶えてしまう木なのです。十六代目、佐野藤右衛門さんのしごとをみてみましょう。

# 羅生門 杜子春

芥川 龍之介 作 岩波書店 913ーア

ある春の夕暮れ、ぼんやり空を仰いでいる若者がありました。名を杜子春といい、その日の暮らしにも困ってしていました。すると、どこからかやってきた老人が杜子春に言葉をかけてきます。この老人は、鉄冠子という仙人で、杜子春は鉄冠子の言葉で二度大金持ちになりました。三度めに会った時、杜子春は鉄冠子の弟子になって修行をしたいと願います。(「杜子春」)